



Title	<書評>Marcel Franciscono, "Walter Gropius and the creation of the Bauhaus in Weimar : The ideals and artistic theories of its founding years." University of Illinois Press, 1971.
Author(s)	宮島, 久雄
Citation	デザイン理論. 1973, 12, p. 92-94
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53659
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書評

Marcel Franciscono,

“Walter Gropius and the creation of the Bauhaus in Weimar: The ideals and artistic theories of its founding years.”

University of Illinois Press, 1971.

かつて私は、Wingler 編の “Das Bauhaus” の書評をし、その中で、この本の出版によって、バウハウスの研究はより正確になるだろうと書いた（本誌3号）。今思えば、それは「日本における」バウハウスの研究と書くべきであった。この本が出版された翌年、Franciscono はドイツで原資料にもとづいて、“Das Bauhaus” によっても明らかにならなかったことを着々と解明していつているからである。彼はそれを、New York University Institute of Fine Arts から研究助成金を得て、1963年から着手し、博士論文としてまとめたのち、出版した。題が長いのは、恐らくそのためであろう。

“Das Bauhaus” に収録された資料しか知らない私にとって、まず驚くべきことは、この本の最後に付録として収録された資料である。周知の事実として語られるバウハウスについて、まだまだ隠された事実があることを、この付録の資料は推測させる。

付録資料はAからFまでであり、Aは第一次大戦直後におけるグロピウスのメモ類8点、Bは1919年春のグロピウスの講演メモ、Cはドイツ工作連盟ケルン総会における原型論争をめぐる書簡とメモ12点、Dは芸術労働評議会をめぐるグロピウスの書簡とメモ5点、Eは無名建築家展の主旨メモ、Fはイッテン事件をめぐる書簡11点、である。

題からもわかるように、研究の焦点は、グロピウスとバウハウスの創設、ヴァイマル時代の展開の問題におかれている。とくに、この研究によって明らかになったことは、従来あいまいであったヴァン・デ・ヴェルデとの関係である。普通バウハウスは、デッサウ時代の展開が評価されて、合理主義、機能主義のデザイン理論の代表のようにいわれ、これは、ドイツでは、ムテージウスの系譜に入れられている。例えば、デザイン史の古典ともされるニコラウス・ペヴスナーの観点がそれである。もちろん、この観点にも誤りはないのであるが、グロピウスには、実はもう一つ別の系譜が考えられること、つまりヴァン・デ・ヴェルデからの系譜が考えられること、それが、ヴァイマル・バウハウスの創設にきわめて密接に関係していることを、付録A、Cによって実証的に明らかにしている（主に

第2章)

ついで、最近日本でも土肥美夫氏らによって焦点をあてられている、バウハウスの表現主義的側面にも、ふれて、シェーアバルト、ブルーノ・タウト、アードルフ・ペーネらの影響のもとで、グロピウスも「未来の大聖堂」思想をはぐくんでいったこと、しかし、グロピウスには工業に対する偏見はなかったこと、彼らより現実的な人間であったことなどを明らかにしている(第3章)。この段階で、マルドナードの抱いた疑問——バウハウス宣言の筆者は、はたしてグロピウスか——がとける。グロピウスは、バウハウス創設当時は決して合理主義者ではなかったのである。このことは、彼がヴァン・デ・ヴェルデの系譜、即ち産業派ではなく、芸術派であったことと合致する。

第4章では、バウハウスが、芸術労働評議会の方針の一貫としての面と、グロピウス個人の意図とが重なっていることが指摘されている。従来も、芸術労働評議会関係の宣言を読めば、芸術労働評議会の方針の一貫として創設された面は明らかなのだが、本書ではさらに、芸術労働評議会の教育部会が芸術教育改革案をねっており、それはオットー・バルトニングの案として、公表されていること、それとバウハウスとは大筋では一致すること、しかし、バウハウスにはバルトニング案とはちがう点もあって、決してバルトニング案に基いたものではないことが示されている。このバルトニング案は、付録に収録されていないが、くらべてみると、たしかによく似ている。ただ、根本的な違いは、バルトニング案は一般教育の改革案であることである。芸術労働評議会の同じ雰囲気のもとでつくられたことは間違いないとしても、両者の関係についてはなお、検討する余地が残されているように思われる。

第5章と第6章は、マイスター会議の議事録なども利用して、実際活動に入ったバウハウスの実情を明らかにしている。とくに、イッテン事件の原因、経緯については詳しく、従来シュレンマーの日記でしか伺えなかったことが明らかにされている。シュレンマーの観察が、非常に正確であったことも、これによってわかったことは、有難い。そして、最後に、初期の工房作品に基本的な形態への逆もどりを指摘し、やがて、デ・スティーレルの影響をうける素地となったことを明らかにしている(終章もこれにつづく)。

多くの原資料に基づく追究の仕方は、きわめて実証的で、自分の論法に資料を利用するといったやり方ではない。むしろ、資料によって事実を語らせ、自分の主張を構築しようとするかのようである。

このような特徴には、しかし、限界もある。それは、例えば Barbara Miller Lane がその著 "Architecture and Politics in Germany, 1918—1945" で明らかにしたような、当時の政治風土の中での、バウハウスに対する見方のゆれといった、いわば「ヴァイマル

文化」の一つの面としての分析は、この研究には求めることはできない。このことは、多くの人がハンネス・マイヤーにかかわる問題に目をむけないこととも共通面があるように思えてならない。恐らく、これらの問題は、バウハウス全体についての、このような詳細な研究が現われてのち、はじめて明らかになることなのだろう。

とはいえ、この研究が一つの出発点となることは間違いない。バウハウスに関する博士論文について、二三知ってはいるが、このような実証的な研究ははじめてのようである。まだ、美術史に限られてはいるが、一種の基礎研究として役だつであろう。あのユーゲン・トシュティールの作家ヴァン・デ・ヴェルデが、何故（のちの）合理主義者グロピウスを、エンデルなどとともに、工芸学校の学長候補に推薦したのか、といった問題が、明らかにされるということは、確かに愉快なことである。冷徹な合理主義者の集団のように思われてきたバウハウスにも、人間的なドラマはあったのである。

なお、著者 Franciscono は現在イリノイ大学の芸術の助教授である。

大阪芸術大学 宮 島 久 雄